



# 九州歯科大学 図書館だより NO.72

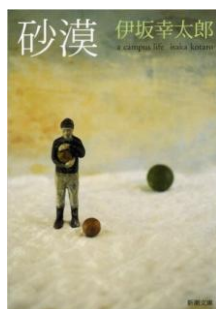
梅雨期に入り、紫陽花が色鮮やかに咲いていますね。さて、選書ツアーの本をおすすめ本として、何回かに分けて掲載していますが、みなさんはお読みいただいていますか。様々なジャンルの本を紹介しています。なにかピンとくる本があれば、ぜひ読んでみてください。そして、本の世界を楽しんで、本で知らない世界を体験してみてください。もし、読みたい本がなければ、選書ツアーに参加してみてください。貴重な体験ができると思います。  
学務部学生支援班



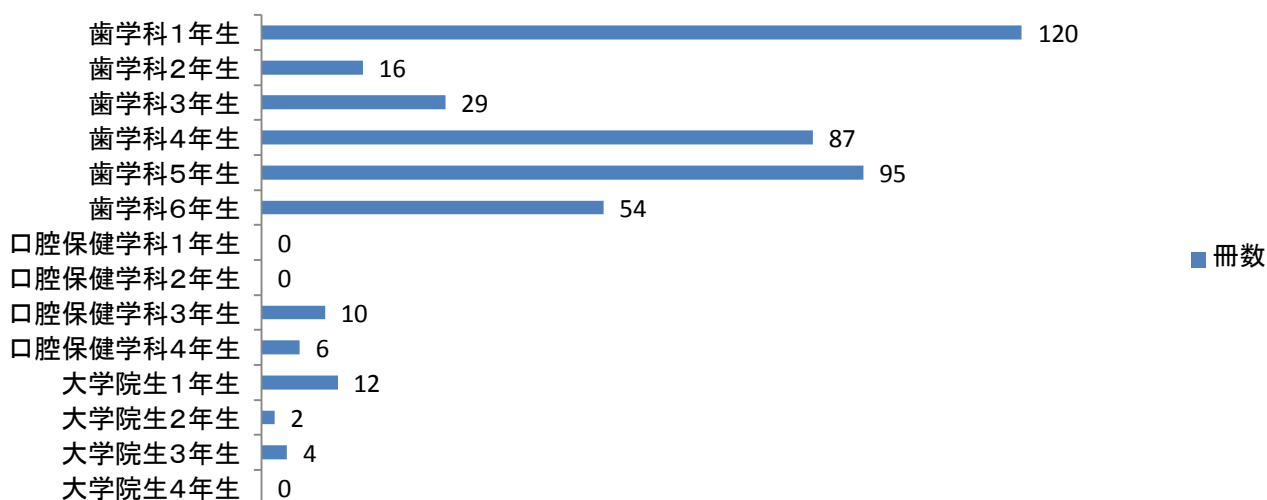
## 貸出ランキング

2016.5

- 1位 砂漠 / 伊坂幸太郎著
- 2位 先天異常；顎関節疾患；損傷；炎症・アレルギー / 麻布デンタルアカデミー編
- 3位 う蝕の診断とリスク予測 / Per Axelsson著；高江洲義矩監訳
- 4位 歯科医師・歯科衛生士ができる舌診のすすめ!：患者さんの全身状態を知るために / 柿木保明編著
- 5位 う蝕学：チェアサイドの予防と回復のプログラム / 田上順次, 花田信弘, 桃井保子編集・執筆；阿部實 [ほか] 執筆
- 6位 現代歯科理工学 / 長谷川二郎, 平澤忠, 高橋重雄編集
- 7位 チェアサイドデンタルマテリアル：わかりやすい歯科材料学 / 川原春幸, 今井弘一著
- 8位 歯科用器材・薬剤便覧
- 9位 ポイントを押さえてスキルアップ!チェアサイドのアシスタントワーク / 小森朋栄, 遠山佳之, 高橋英登編著；筋野真紀 [ほか] 執筆
- 10位 わかる!身につく!生物・生化学・分子生物学 / 田村隆明著

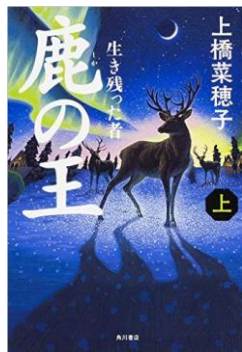


## 貸出冊数(5月)



# 選書ツアーおすすめ本

## 鹿の王 上橋 菜穂子



いつの時代ともどの地域・国々とも明かされない、巨大な帝国とそれに属する辺境地域が舞台で、様々な民族が登場する物語である(自分は中世の中央アジア地域を想像していた)。架空の設定ながら、冒頭からその独特の世界観にぐいぐい引き込まれて読み入ってしまった。物語の主人公となるのは、かつて戦士団を率いていた戦士ヴァンと若き天才医師ホッサルの二人だ。巨大帝国の辺境にある岩塩鉱が、犬の夜襲にあってほんの数日でなぞの病気の蔓延で壊滅してしまう。生き残ったのは奴隷として働かされていた主人公ヴァンと一人の赤ん坊のみ。体の異変を感じながらも、女兒をユナと名づけ、岩塩鉱を脱出して2人で生きていこうと旅に出る。一方、岩塩鉱を一夜で滅ぼし、自らのルーツである一民族をかつて滅ぼしかけたその致命的な病「黒狼病」の治療法や薬の開発に取り掛かるのがホッサルである。一時代前には隆盛を誇った「貴人」と称される民族に属する若き天才医師は、現在の覇者「東乎瑠」帝国の上層部に重宝される自分の存在を、宿主と共生する微生物のように感じている。病が微生物によって引き起こされること、噛まれても生き延びた奴隷の存在に気づいたホッサルは、早く薬を作らねばと病気の正体を探っていく中でやがてヴァンと出会う。

個人のストーリーだけでなく、征服者「東乎瑠」と従属する「アカファ族」、辺境のさらに辺境に追いやられた「火馬の民」「沼地の民」、かつては一時代を築いていたのに黒狼病によって山の奥地に追いやられた「オタワルの貴人」…、物語には様々な民族が登場し、その為政者・リーダーたちはしたたかな生存競争を繰り広げる。虐げられ故郷を追われたことに徹底した復讐心を抱いて反乱を企てる者、恭順しているように見せて裏で色々日和見している者、運命を受け入れて移住者と共存している者…。まるで宿主の体内でバランスをとりあう微生物のように…。



架空の時代の架空の国の話という点・主人公たちとともに架空の「飛鹿」「火馬」といった動物が生き生きと躍動するというではファンタジーであり、何者かが病というものを利用して利用しているのでは? という疑惑を解明していく点ではミステリーともいえよう。架空の病気ではあるが「黒狼病」に立ち向かい、「ウイルス」「抗体」「弱毒化ワクチン」に匹敵するものを解明・開発する過程が詳しく書かれているという意味では医療小説? の範疇にも入りそうだ。ヴァンとみなし子ユナとの間に離れがたい絆が生まれる親子の物語でもあり、主人公の周りの人たちの覚悟ある生き様と強い絆が描かれた人間ドラマでもあろう。黒狼病ウイルスによってヴァンの体が己のものではなくなっていく中で「本能・衝動」と「理性」のせめぎ合いは人間が生活している限り考える永遠のテーマと思う。「鹿の王」とは、群れを率いる王ではなく、群れの存続のために時に命を張って群れを守る鹿のことであるが、ヴァンは最後に鹿の王になったのであろうか。自分や群れの安住の地を探して生きていくことを選んで森に入ったのであろうかと私は考えている。そしてヴァンを追って森に入っていったユナや仲間たちと共生していったのであろうと。色んな視点から読んで色々な面白さが感じられる読み応えのある壮大な物語である。



## 黒い家 貴志祐介

物語の前半はドラマ的一幕であるような、仕事に勤しむ主人公の周りの出来事を人物像も含め詳細に描写している。中盤から徐々に雰囲気が変わり始め、じくじくと恐怖が蓄積されていき、後半に怒涛の勢いで爆発する。人それぞれ様々なこわいものがあるとは思いますが、全員が口をそろえて怖いというような、本当に怖いものを単純ながらも的確に表現した作品である。

## 天災から日本史を読みなおす-先人に学ぶ防災 磯田道史



テレビでおなじみの磯田教授による著書である。地震や津波は古代からあったわけ、その当時の様子を歴史から学ぶことで防災につなげることができるというのが磯田さんのスタンスである。豊臣政権崩壊の引き金はその当時発生した伏見地震であったという話も興味深い。地震のあとの対応が悪く、人心は徳川に移っていったというわけである。宮城県南三陸町についても記載がある。例の3階建ての防災庁舎もそもそもあそこに建てるべきではなかったという。地名は塩入(しおいり)といい、江戸時代、津波高潮の被害があったのでそういう地名がついていたのである。他にもマツもまづかった。マツが津波によって根こそぎ抜けて流され被害が拡大したようである。実際、マツがなかった地域の住宅が残ったという。本書から得られる知識は多い。